

『本当の話』 訳と解題 (2)

モンテスキュー

田 口 卓 臣 訳

解 題

前回訳出した第Ⅰ章の語り手と異なり、第Ⅱ章の語り手は、人格的な卑しさが際立っている。モンテスキューがあえてそのように語り手の人格を造形していることは、明らかである。この卑しさ（もっと言えば、露悪趣味）は、語り手自身が口にする表現や言葉遣いに顕著に現れている。そして、まさにそうした人物の語りを通して、彼自身が入り出る宮廷や社交界の滑稽とグロテスクが活写されていくのである。

こうした第Ⅱ章の設定は、文学史的に重要なポイントを含んでいる。何と言っても注意すべきは、語り手が入り出る宮廷や社交界の多様な人物像の提示を通して、17世紀モラリスト文学におけるポルトレ (portrait) の手法を継承していることである。より正確に言えば、モンテスキューは、ポルトレと箴言 (maxime) を絶妙に配合しながら提示している。何らかの人物のポルトレを描写するにあたって、人間の心理や行動様式を鋭くテーゼ化した箴言を挿入しているのである。この方法は、17世紀モラリスト文学 (ラ・ロシュフコー、パスカル、ラ・ブリュイエール) に対する参照意識をうかがわせる。モンテスキューは、最初の長篇小説である『ペルシア人の手紙』においても、自身の政治思想の集大成である『法の

精神』においても、こうしたポルトレと箴言の手法を駆使しており、この18世紀前半最大の啓蒙思想家にとって、どれほどモラリスト文学の占める比重が大きかったかが理解できる。

ちなみに、モラリスト文学の影響については、モンテスキューやディドロのようなフランスの啓蒙思想家に関してのみならず、ニーチェのような近代ドイツの思想家に関しても、系譜学的な研究を展開していく価値があるように思われる。彼らの思想は総じて、断章形式の考察の中で、様々な実在なし架空の人物像を提示し、それらの人物の対話やポルトレの合間に、人間存在の本質を一気に抉り取る箴言を配置していく、という特徴を持つからである。

さて、モンテスキューの『本当の話』は、奇想物語の形式を介して、多視点的なポルトレと箴言を配置している点が、独創的である。例えば、前回訳出した第Ⅰ章では、動物から動物への転生を繰り返した語り手が、その転生を通じて巡りあった世界各国の王侯貴族や世間の滑稽とグロテスクを語っていた。これに対して、第Ⅱ章では、どんなに人間から人間へと転生してもろくに成熟しない語り手が、やはり同じように社交界の滑稽とグロテスクを活写している。何度も転生を繰り返しながら、その記憶を完全に保持する語り手たち、という奇想天外な設定の中で、ポルトレと箴言を通して、社交界に多方向的な光が当てられていくのである。

『本当の話』の語り手の在り方は、19世紀文学における語り手の在り方と比較するとき、また別の文学史的相貌を垣間見せてくれる。『本当の話』の語り手は、ある種の超越的な視点に立って、互いにかなる接点もない無数の人物のポルトレを統合する、という機能を果たしている。その機能の果たし方が、いわゆるリアリズム文学に慣れた者の目には、奇怪かつ異様な印象をもたらすのである。

他方、例えば19世紀以降に誕生した「第三人称客観小説」においては、

不在ないし匿名の語り手が、完全に超越的な視点に立って、無数の人物（像）の諸関係を統合することが方法論的に可能となる（19世紀にも様々な文学動向がある以上、こうした総括は粗雑に聞こえるかもしれないが、少なくとも18世紀に「三人称客観小説」が登場しえなかったという点だけは確かなことである）。この点を踏まえるなら、何はともあれ一種の超越的な視点を保持しながら、無数の人物（像）と関わりつづける一人称の語り手を創出したモンテスキューの『本当の話』は、やはり注目に値する。「三人称客観小説」が成立する以前の地平において、18世紀的な一人称の語りの形式を継承しつつ、19世紀以降の超越的な視点にも漸近している、という二重性を、この作品は宿しているからである。

最後にもう一点、こうした文学史的な事項が、モンテスキューの法社会学においても重要な意味を持っていることを付言しておこう。『法の精神』で無数のポルトレヤ箴言が駆使されていることはすでに述べたが、この点に加えて注意したいのは、『本当の話』における無数の物語が織りなす諸関係が、『法の精神』で記述される無数の法の諸関係とよく似ているという点である。モンテスキューは『法の精神』において規範主義的な「法」理解をしりぞけるとともに、諸関係の総体としての「(複数形の)法」を実証的かつ社会学的に記述することに精力を傾注した。そこには、どんなに理念的に「正しく」見える法規範であっても、個別具体的な社会的現実に対して無批判に適応できるわけではない、という理論的信念が垣間見える。モンテスキューがこの晩年の大著で、古今東西の国々や共同体の無数の「法」のケーススタディーに徹したのは、そのためである。ひとたびこの視点に立つなら、『本当の話』における語りの方とは、いわば社交界に巣くう滑稽とグロテスクの「諸法則」を、様々な人物像のケーススタディーの集積を介して見定めるために創出された、とすることができるかもしれない。

II

アイエスタが話し終えると、エフェソス人が次のように始めた。

——アイエスタさん、あなたがいま述べたことに、まったく驚きはありません。様々な転生を通して見たことを覚えていられるように神々がお認めになったのは、あなただけではないのです。偏狭な人間は、現在の自分の生しか知らないものです。もっと知性の豊かな人たちは、いくつかの生で身に着けた知識に恵まれるものです。

私に言えるのは、自分もその一人だということです。つまり、人よりもいくぶん優れたところが私にあるとすれば、それは虚栄心がないことです。数世紀にも及ぶ経験から私がいくらかの特権を引き出したからといって、驚くに当たるでしょうか？

しかし、アイエスタさん、あなたが述べたことは、私に言えることと実に多くの共通点があるので、私の話は大幅に縮めるつもりです。驚異の中でも最も驚くべきことについてしか語らずにおきましょう。

私が人間になった時、巨大な獣だった頃と同じくらいの徳を持てるように願うべきだったのでしょう¹⁾。ところが、かつては備えていたあの精神の穏やかさも、あの思考の柔軟さも、あの賢明さや慎重さも、もはや私にはありませんでした。それどころか、情念や気紛れ、思いがけぬことに振り回されっぱなしでした。

人間界における私の門出は、幸福ではありませんでした。というのも、十八才のとき、絞首刑にされたからです。その原因は述べるつもりです

1) ここで、「巨大な獣」とは、おそらくI章の「象」を指していると推定される(拙訳『『本当の話』訳と解題(2)、『仏語仏文学研究』53号、中央大学仏語仏文学研究会、2021年2月15日発行、191-3頁。II章の語り手は、I章の語り手とは異なるので、この点で内容的に齟齬をきたしている。

が、簡単に触れるにとどめたいと思います。私がとてもきちんと振舞っていたこと、そして、あらゆる方面で、私の態度が大いに称賛されていたことを述べておけば、十分です。

「まったく」とある職人が言いました。「あいつの仕事は、評判が高いな。」

「俺もこの方面では」と別の職人が言っていました。「習熟している口だよ。かれこれ三十年来、こういう集まりには欠かさず出席しているからね。だが、あいつくらい立派にやり遂げた男には一度も会ったことがないね。」

アイエスダさん、私は言わなくてもよいことをあなたにお話していますが、これまで絶えず転生してきたので、自分を一人の個人とみなしていません。私はとてもしばしば道楽者でしたし、まっとうな人間だったことはかなり稀でした。これは私の過失というより、人類の過失なのです。そもそも私は、自分が責任を取るべきは、現在の自分の人生で起きることについてだけだと信じていましてね。あなたも、私が目下のところ善人だということは疑っていないはずですし。

私がメッセネに生まれた時、若くて綺麗でお洒落な妻をめぐりました。この妻は、わが家にやって来るどんな若者にも、私の好意を分け与えていました。私は嫉妬するようになりました。妻はこの苦悩をいやすために、私の嫉妬がはなはだもつともだということを示してくれました。その時以来、私はびたりと嫉妬を止めました。そして私たちは、この世で最も聡明な暮らしをしたのです。

その妻が死ぬと、昔は美しかったある女と結婚しました。この女は、あんたがあたしに惚れたのは、あたしがかつて沢山の愛人を持ってたからよね、と言い張っていました。私は情婦を一人抱えると、俺が妾を囲えるのは、払いがきちんとしているからさ、と言っていました。ところが、この

女はこの女で軍人を抱え、軍人はアポロンの巫女を抱え、巫女は笛吹き男を抱え、笛吹き男は高級娼婦を抱え、高級娼婦はある召使いを抱えていました²⁾。私はこうしたすべての所帯を一瞬にして吹っ飛ばしてしまったのです。最初の妻の信用のおかげで、私はコリント王の徴税を請け負っていました。わが家には高位高官の方々が食事に来ていましたが、まさにこの方々に相応の不作法を働いたのです。私は徴税の仕事でへまをやらかし、罷免されました。そして私がもうピンハネできなくなるや、誰もが、あいつはペテン師だと叫びはじめました。

次なる変身では、シキオンの地で実にひどい詩人に生まれました。どんな転生においても、この時ほどぼろぼろの服を着たことはありませんでした。私ははじめにも、家柄が高いだけで無知な者たちや、そんな者たちを苦にもしない卑しい連中に噛みつくことに一生を費やしました。私は、まる数年も壺の中で断食させられたクサリヘビのようでした。周り中に毒を吐き散らしていたのですが、その毒は誰にもかかりませんでした。

また別の転生では、宮廷詩人になりました。私はまず、自分の職業にさんざん軽蔑を示した上で、いつもこう述べていました。「まったく、なんてことでしょう！ 私が宮廷での隷属状態から解放されることは決してないのでしょうか？」

ところが、私は二、三の悪行を働けるくらい幸せだったのです。ある行動が自分の名誉を傷つけるかもしれない場合は、妻に肩代わりさせました。そして、あまりに不法な打ち明け話をする間抜けな男が世間の敬意を失うと、容赦なくその男をののしりました。おかげで、人はこう述べた

2) ルサージュの小説『チュルカレ』(1709年)には、こうした愛人同志の寄生関係の連鎖に関する記述がある、という(原注、p. 329)。しかし、こうした連鎖関係は、18世紀文学全般に見られると捉えたほうが適切だろう。例えば、デイドロの『運命論者ジャックとその主人』や『ラモーの甥』は、そうした事例の宝庫である。

ほどです。「あの方は、卑しい言動に耐えられないんですね。」

善人が不幸になったらベテン師とみなし、ベテン師が好調なときは善人とみなしたものです。私は自分を侮辱したり軽蔑したり失望させたりするすべての者たちを、友人として遇しました。そして、自分よりも地位の低い連中に関しては、その連中が自分に害を及ぼしえないかぎり、敵として扱いました。私はあらゆる宮廷人の運勢をこっそりと入手していました。ある人の出世を予見できたら、その人の前ではへりくだり、その人の境遇を取り違えていた時は、きちんと誤りを改めて、もはや関わりを持たないようにしました。

アイエスダさん、私がおこなった考察についてお伝えしましょう。あらゆる時代に、あらゆる場所で、あらゆる身分で暮らしてみても思ったのは、名誉は決して私が悪行を犯すことの妨げにはならなかった、ということです。不名誉な罪であっても、必ず、名誉に傷のつかない犯し方があることに気づいたのです。この二度目の転生以降の経験で認識した小さな原則に基づいて³⁾、私は法を犯したり守ったり、誠実になったり不誠実になったりしながら、名誉が私に許した唯一のやり方で、いつも最大限に殺したり盗んだり騙したりしました。

次なる人生では、当時最ももてはやされた人物でした。私はエジプト王の卑劣な将校だったのですが、その頃、幕舎に仲間を置いて、テーバイへ賭け事をしに出かけたくなりました。神のご加護で、私は見事な腕前でしたし、運が私に従わない時も、私のほうが運を引きずり回していました。私に破産させられた貴人たちが、どんなに私を愛していたか、あなたには信じられないでしょうね。彼らは絶えず私を抱擁し、期日までに支払いができないことをさんざん詫びていましたが、その金はずっと私がか

3) 「二度目」は数えまちがいだろう。ここまでで、すでに「三回の転生」が語られている。

ら騙しとったものでした。というのも、すでにお伝えしたように、私は道徳にかなった振舞いをするために賭け事に行こうとしたわけではないからです。しかし、私の見事な細工のおかげで、彼らは大いに私に好意を抱いていたので、ある紳士と退屈な賭け事をしなければならぬと知った時にはがっかりしていました。人々は私をあらゆる娯楽の仲間に入れてくれましたし、私も喜んで社交仲間から奪い尽くしたので、ご婦人たちは皆、私を盗み見るようになりました。このことは私にとって、実にしばしば負担となりました。なぜなら、そのせいで不注意が重なり、持ち金を上手に賭けることができなくなったからです。私が仲間内に取り次がれると、一同の喝采が起きたものでした。仕事も、能力も、生まれも、才気も、誠実も、学問もないのに、私は重要人物で通っていたのです。

私はコリントの町で次なる生を始めました。生まれた時から顔がかなり美しく、態度は自信に満ち、精神はたいへん自由でした。私の最大の才能は、妙にたやすく人から借金できることでした。私は、みんな実に親切な人たちだと思っていたのですが、それまで友人だった一人の男のことが、耐えがたくなりました。というのも、顔を合わせるたびに、金を返せ、と迫ってきたからです。この男はあまりに愚かだったので、私の言い分に引きずりこむことができませんでしたし、いかなる和解案にも彼が耳を貸すことはありませんでした。彼はあらゆる限界で私を中傷しました。あまりにずけずけと私の噂話をするので、とうとう彼を黙らせるために、棒で何発か殴らざるをえなくなりました。彼はじっと殴られるがままでしたが、そのことが、ある意味で私を苛立たせました。そうと知っていたなら、すぐにでもお見舞いしていたでしょうからね。私の借用証書が次第に出回りました。どんどん増えるばかりだったので、冗談を飛ばして事態を茶化するのが一番だと私は考えました。人がこの件について真面目に語るのを邪魔してやろう、としたわけです。おかげで、金言を三つか四つひねり

出す必要がありましたが、そうやって窮地を脱したのです。断言しますが、幸いにも厚かましく生まれついていなかったなら、私は千回も名誉を傷つけられていたことでしょう。ご存じのように、慎み深い人の欠点はいつでも厳しく評価されるものです。それに、破廉恥というものは、破廉恥を容赦せずにはいられないので、無防備な内気さに対してはいつでも高慢になりうるのです。折から、両親の一人が死に、私はたいへん莫大な遺産を受け継ぎました。私は別の社交仲間の中では誠実になろうと決意し、しばらくその役目を果たしました。誠実になる術を心得ているのは、見事なくらい狡猾な手管なのです。

アイエスダさんには白状しますが、こうして転生の話をする中で、やや自分の性格を誇張しすぎました。この世でうまくやっつてのけるためには、半分は間抜けで、半分はパテン師でなければならないだけだ、と私は気づいたのです。そうすることで、誰もがあらゆる人間と釣り合いをとってきたわけです。人はあらゆる方面で、間抜けにも、才人にも、パテン師にも、紳士にも行き着くものですからね。

その次の生では、中肉中背でしたが、金髪で、顔つきは雄々しく、肩幅の広い男でした。私は、五、六名の老女たちや、五、六名の若い醜女たちの愛人でした。この道を歩み始めた頃は、きついなと感じていました。しかし、習慣の奇跡と一種の機械仕掛けの力のおかげで、老いにも醜さにも慣れてしまいました。こうして、美さえも自分にはさほど感銘をもたらさないだろう、という境地に達しました。なぜなら、魅力的な婦人という観念は、もはや私の精神のうちに欠乏という観念しか呼び覚まさないからです。私は自分の見解についてさほど自負していたわけではありません。人はこうした見解に驚き、それを表現させますが、金を出してくれるわけではありません。私としてはご婦人に、とにかくご自分の良き行動のしるしを、私の身なりや衣服や遊び方に見いだしてほしかったというだ

けなんです。私が成し遂げた驚異の数々についてお話ししたら、あなたはびっくりすることでしょう。身に着けた気前の良さにはずみを付けようとしていた頃、私はいつでも最初に自分の値打ちを知らしめる主義でした⁴⁾。もちろん私は知っていましたよ。つまり、ご婦人たちは、特定の男と一緒に破産するにはあまりに吝嗇だということ、彼女たちが見捨てるのは、欠陥もちの愛人だけだということ⁵⁾、そして、女の気紛れと呼ばれるものには、しばしば多くの道理があるということ。ね。

要するに私は、うるわしい魅力を失った女性を慰めようと努めたわけです。私は女性の衰えを弁護し、女性のしわを讃えました。他の男たちがそうするのを止めても、女性に賛辞を贈ったものでした。女性が示す感謝については、私には何の文句もありません。もっとも、文句がないのは、ご奉仕とともにご褒美も終わるほど⁶⁾、ご褒美がご奉仕に依存しているという一種の公正さに関してだけです。ね。

アイエスタさん、神々というものは、ある魂を浄化したい時、優れた動物からもっと優れた動物へと次第に生まれ変わらせるものです。そして、その魂が人間の体に閉じこもり、お勤めを終えることになると、何らかの徳の刻印を受けた生からもっと多くの刻印を持つ別の生へと導いていくのです。正直な話、私の目指す先が徳だったとしても、多くの遍歴を重ねたにも拘わらず、ほとんど前進しなかったのは認めねばなりません。

私はまた生まれ変わりました。幼い頃のこと、乳母が木の下に私を寝か

4) 「値打ち (ce que je valais)」は、性的な意味である。より良い訳語を模索しているが、今回はこの訳語を用いた。

5) 「欠陥もち (les amants qui ont tort)」も、性的な意味である。「解題」でも述べたように、この語り手の卑しさを強調するために、モンテスキューは語り手自身が用いる語彙を逐一、卑しいものとして提示している。

6) もはや注釈は不要だろうが、「ご奉仕 (leservices)」や「ご褒美 (la récompense)」も、性的な意味で捉える必要がある。

せておいたところ、戻ってみると、数匹のミツバチが私の唇を蜜で覆っているのを見つけました⁷⁾。私の手は小さくてピロードのように柔らかく、眉は白銀に輝き、両目は欲しいものに実におだやかな眼差しを投げかけていたそうです。私は学校に入っても、学友たちが繰り出す足蹴りなどまったく苦にしませんでしたし、彼らの侮蔑も、私たちの結びつきを揺るがすことはありませんでした。

自分で人生の計画を立てられるようになると、私は大貴族を探しました。専属の賛美者、つまり称賛をもって奉仕に替えようとする賛美者を必要としている大貴族を、です。一人見つけたと思えたので、私はこの人物に夢中になりました。彼の演説はぜんぶ支持しました。あまりに追随していたせいで、彼がその時どきの話題について同意したり拒否したりするのにあわせて、必ず首を振ったり下げたりしました。ちっとも賛成する筋合いがない場合でも、この私が反論したことが一度でもあるなら挙げてみる、と言いたいところです。まったく、この人物はあまりにけちだったので、どんなに施す術があっても、断じて与えようとしませんでしたからね。

この勤めが終了すると、私はもっと多方面に博愛の心を示すようになり、賛美の範囲はどんどん広がりました。ほとんど困ったのは、「有徳の士」と呼ばれる連中でした。この連中ときたら、どんなに些細な私の賛辞も、貢ぎ物か侮辱のように受け取っていました。私の賛辞は、いわば剪定

7) 原注によれば、この挿話は、プラトンの『イオン』を念頭に置いている、とされる。そこでは、詩人のインスピレーションの喩えとして「蜂蜜」が引き合いに出されている。「思うに詩人たちは、われわれにこう語っているはずだ—彼らは、あたかも蜜蜂さながらに、彼らみずからも飛びかいながら、ムッサの女神たちの庭や谷にある蜜の泉から、その詩歌をつみとり、われわれのもとにはこんでくるのだと。」(『イオン』534a-534d：森進一訳、『プラトン全集』第10巻、岩波書店、1975年、128-9頁)。

してもらえない木の塊でした。このため、せっかく飾り付けを始めても、いつもそれを放置せざるを得なくなりました。ところが、世間で虫けらのようにみなされている人々と一緒の時は、私もぐっと調子がよくなりました。

「皆さんは」と私は彼らに言ったものでした。「実に優雅に這い進むので、空高く飛ぶどんなものよりも皆さんのことが好きですよ。ご存じでしょうか。皆さんは、この世で最も美しい小さな足を無数にお持ちなのです。その足で遠出はできないかもしれませんが、その歩みは確かです。大抵の人には、皆さんの体表に小さなうろこしか見えていないのですが、もっと近くで皆さんを見ていて、よく知っている私には、ダイヤモンドや真珠、ルビーでいっぱいの中身が目に入ります。」

アイエスタさん、私はくつろいだ語り口の中で、比喩に富む文体を手に入れようと躍起になっています。実際、私が今感じているのは、ほとんど単純な文体を用いたことがない転生の頃の精神状態の影響なのです⁸⁾。

次なる人生では、私は自分で自分の性格を作り上げました。私の精神は少し鈍かったのですが、鈍重な愚か者はいつでも機敏な愚か者の感嘆の的になること、反対に、機敏な愚か者は大いに他人を軽蔑することに、ほとんど本能的に気づいたのです。この発見は私に、自己変革に専念することを決心させました。私は自分の頭脳から何か引き出そうと不断的努力を重ねましたが、うまく行かなかったため、ただおしゃべりするにとどめると、思考はおしゃべりの遠く後ろへと放置しました。幸福な偶然というものもあるわけですが、絶えずサイコロを振るように話題を投げながら、時どき目を出すようにするのは、不可能なことでした。私はわが機械をいっ

8) 原注では、この箇所が、マリヴォー演劇に特有の洗練された言い回し（「マリヴォーダージュ」）を参照している、と指摘されている。しかし、この注釈は、必ずしも確かではない。

そう活発に動かして⁹⁾、人から注目される場所ならどこにでも運んでいきました。私はあちこちで挨拶し、右も左も抱擁しました。くると回転すると、自分自身に突進し、うまく行かなかったドジをようやく踏めるようになりました。どんな話題を持ちだすときも大笑いしながら快活に振舞ったばかりでなく、そうすることで楽しみが増していきました。それはほとんど、楽器の伴奏を通して歌声が大きくなるようなものでした。こうして、人を苦しめる性格がひとつ出来上がったわけです。というのも、私が当時暮らしていた国では、一般に、人を楽しませる者、人を楽しませない者という二種類の人物しかいなかったのですが、彼らは人を楽しませることができなくても、人が自分で楽しめるように助けたからです。そして、この国にいる以上、どの家の正面にも、次のような宣言文が掲げられたことは申し上げておきましょう。「退屈させるな。そうすれば、すべてを得る。退屈させてみよ。そうすれば、何も得ない。」

「男たちに評価されたいなら、必ず女たちに好かれることだ」という格言や、「十四才で自分を磨き終えよ。六十になったら、自分を育て始めよ」という格言、さらには、「くだらないことを言えるほど幸せなら、何か言ってやろうという気は起こさぬことだ」という格言が、絶えず繰り返されたものでした。まったく、こういうことに終わりはありませんからね。

町では十分に敬意を払われたことがない私でしたが、宮廷の助けを借りて、やっとそれを手に入れました。私が宮廷に出向いた理由を申し上げたら、あなたは驚かれるかもしれませんが、要はその宮廷から戻ってくるためだったのです。ブルジョワたちの中にいた時、私は自分が彼らから受けたあらゆる軽蔑をそのまま返していました。人々は、私がしゃべると、そ

9) 「わが機械 (ma machine)」とは、デカルト主義の用語で「身体」のことを指す。18世紀フランス思想における身体論は、肯定するにせよ批判するにせよ、「身体」を「機械」とみなすデカルトの機械論を念頭に置いていた。

のつまらない発言に感心し、私がしゃべらずにいると、その沈黙に感心していました。私は、陛下は今朝お起きになりましたよ、とか、明日は狩りにお出かけですよ、などと言っていました。天体の動きや星辰の移り変わりに詳しい哲学者の満足も、日食だとか、大臣や君主の登場だとかの予言が的中した時の私の満足ほどではなかったはずです。

しかし、人が世の中の諸問題について話しかけてきた時は、自分の砦にこもったことを白状しなければなりません。私は慎重な態度で社交仲間から離れていました。好奇心に対する障壁として、顔にしわを寄せたものでした。私にとってはありふれた多量の言葉の代わりに、もはやいくつかの単音節語しか用いなくなりました。こうして、私のような人間に凶々しくものを尋ねてはいけないということを、誰もが理解したわけです。

シチリアに生まれた時、私は絶大な尊敬を勝ち取りました。宮廷人や都会人と同じくらい丈夫な胃袋をたずさえて、社交界に入ったのです。この丈夫な体質のおかげで、愛すべき人物だという評判を頂戴し、著名な友人を得ることができました。私は戦争の時に出世しました。夕食や夜食をとる時は、いつも変わらずもりもりと食べたものでした。人々は、私になにか才気があるのではないか、もしも切ったり飲み下したりすることにかかりきりでなければ、まったく他の連中と同じように、夫人たちをけなしたり大臣たちを攻撃したりするのではないかと疑いさえしたものでした。

私の胃袋が衰えると、まもなく人々は、もはや私がさほど大した仲間ではないことに気づきました。しかし、丈夫さに関して失ったものを、私は別の面で取り戻したのです。つまり、洗練された味覚によって名を揚げたわけです。どの家に行っても、私はその邸宅のご主人を相手に長広舌をふるいました。煮込みがまずければ、物理的な原因を示した上で、さほどまずくはない理由まで付け加えたものでした。煮込みが美味しいときは、どうぞすればもっと美味しくできたかを伝えてやりました。主人はどんな言い逃れ

をしても、私が打ち負かしたので、最後は同意せざるをえなくなりました。私は会食者と一緒に戻ってくると、さっき述べたことを繰り返したり、いくつか昔の出来事や身近な話題を蒸し返したりしました。なぜ昨今は愛すべき人物がわずかなのかを解き明かし、昔の放蕩者と現代の放蕩者を比較した上で、前者は色事に関して力がみなぎっていたが、後者は精彩を失くしている、と結論しました。私は、裏路地で培われた教養や居酒屋への追放刑について嘆いてみせました。